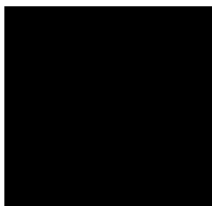


棚原(西原村)

宮城 聡

時 一九六九年十一月二十三日
場所 字棚原 公民館

氏 名 現 住 所
伊 波 貞 子
伊 波 ウ ト
城 間 英 吉
城 間 よ し 子
宮 里 太 郎
宮 里 盛 光
比 嘉 よ し 子



解説

棚原の字は、南西に向かって傾斜して、北東の方は丘になり、今ではそこに樹木も繁茂している。会場の公民館は、部落を上りつめたところにある。

この日は風が強く、吹きさらしの公民館の離れの事務所が会場で、わたしは坐っているうちに、流行中の感冒にかまえられたのか、喉の様子がおかしくなって咳が出はじめた。

わたくしたちは十五日を振り出しに二十日まで一日だけ休み、連続強行策で、午後一時から夜の九時、十時まで録音を続け、二日

だけ間を置いての棚原字座談会だった。

一通り個人記録がすんで、当時の部落の戦争の様相を語り合っていると、見るように心にそれが描かれる。

「この後ろに陣地があったもんですからね、この森のうしろに」

「あの東毛(毛は野原)の砂糖小屋にあった砂糖車を敵は高射砲と思っただけで、それを目掛けて艦砲は大変でしたが、夜にそれを捨てて来てからは、弾を落さなくなつた」

「艦砲射撃が始って一か月こつちについて、四月二十三日に逃げましたから」

「野戦病院の後などは艦砲を撃ち込んで畑のように土ばかりになつていたんです」

「道をつぶすのに、艦砲がカーブを切つてつき起して、艦砲をうつつうつとまるで耕すようにしたですからね」

「その時から、木は立っているのは一本もなくなつてね、最初は擬装といって青い木で蔽うたが、しまいはなにもなくなつて」

「戦争がすんで帰った時、どこもかも真白だから、罐詰の空き罐が月夜なんか、遠くからでも光って見えましたよ」

「艦砲は十のうち四つくらいしか破裂しなかったが、数が多いからうんと破裂しましたよ。雨くらいは降つたでしょうね。ボンボンボン、といつて、撃ち込む数が多いんですから」

「艦砲は最初は恐かつたんですが、後には馴れてあまり恐くなくなつていました」

「爆弾は落しませんでした、艦砲は陣地がありましたから、そ

れに大砲とか、その関係で酷かつたと思いますな」

「野戦病院では死んだ人を埋めたのが大変なものでありました。

戦後の遺骨ですね、全部青年が出て集めて、足は足、縄で束ばねて、頭は頭で、頭は針金で鼻に通してまとめて、そうして担いで、まあ西原の方に集めたわけですね、野戦病院は多かつたが、民間の家にも遺骨は沢山ありましたよ」

「艦砲は土の中に打ち込まれるのが多かつたんですが、今、空の见えない鬱蒼とした森や林も、一時間後には、木の幹一本もない裸かになりましたね」

「艦砲は、棚原の字も周囲も全部です」

まだいろいろと話されたが、現在は相当に樹木の繁茂している棚原字が、周囲の丘おかにも、一本も木のない姿を想像させて、戦争による破壊の激しさが察しられた。

当時の戦争犠牲者について、ここでは調べてないようだが、人口は千人にわずかに足りないが千人程はいたのではないかと思われる。大体やはり半分以上の人命がここでも犠牲になつていられるらしく、これまでの個人座談会から推察される。

ことに宮里現区長さんなど十一名家族全員が全滅しているし、近親の五家族も全滅している。伊波貞子さんは婚家も七人の家族中五名、実家の兄弟七名中五名まで犠牲になつている。棚原は、西原村でも犠牲者の多い方らしい。

伊 波 貞 子 (三十四歳) 教 職

わたしたちは那覇にいたんですけど、十・十空襲で焼け出され

てですね、郷里は棚原ですからこちらに越しました。三月頃わたしは身重であつたもんですから、お産はお墓でやるつもりで、全部お産道具もお墓に運んでありました。読谷から敵が上陸したといふんですね、墓の真向かいの堀川まで敵兵が来たといひましてね、それでわたしの家の下に自然壕がありましたのでそこへ入つていたんです。姪二人、二高女の三年と一年ですから軍の衛生看護婦ですが、あちらへ二人やつたんですけれど、今晩中に首里に移らないと、あしたは敵兵がこの部落へ入り込むから早く今晩中に親元に帰つて首里に下るよういわれたといつて、娘たちが帰つて来ましてね、それで夜通し歩いて、家族六人と、わたしの主人と子供二人の四名と、姉はこちらで艦砲でやられたんです。それだけの人数で、首里に夜通し、明け方です、歩いたんです。わたしは妊娠して、腎臓気があるもんですから、歩くのはとても大変でした。末子は三つでしたがこれは姪に負わして、上の六つの子は歩かして、わたしは杖をついて、識名まで歩いて行つたんですね。

あちらには一日いたんですけど、敵兵が浦添方面までやって来ているという噂があつたもんですから、じゃこれでは大変だから早くしのぐ算段をおかないと、ということ、夜通しにまた、主人と兄とが一応安全なところを見つけて来てですね、移動しました。島尻の方で、二、三か所移動しまして、具志頭ですかね、壕はなくてですね、友軍の弾薬倉庫の壕に入って、兄と主人は、いつも夕方から安全な場所を見つけないと、あしたは引越すといつたんですが、わたしは歩けないから、子供たちを守つて壕の中に引越込んでおつたんです。食べ物、最初米を持っていましたので、

小さいおむすび一個で、一日の食事にしていました。

わたしはその弾薬倉庫の壕でお産をしたんですね。ちょうど、隣りの壕に西原の人で産婆さんが一人いると聞いたもんですから、そのおばさんに来て貰って、処置して貰ったんですけど、水もなければ、火を燃やすこともできなくて、子供は二日は生きていましたが、ここで死にました。わたしも冷え込んでですね、顔や体中が全部腫れて、もうとても歩くことができません。それで主人は、子供のことを考えたら歩けるから、子供たちの後について来いといって、それで後をついて行くんですがどうしても歩けませんので、主人は、子供たちを安全な場所へつれて行ってから、戻って来て、わたしの手を持ってつれて行ったりして、ずつとギーザパンタのところに追い込まれて、あそこの自然壕、露天壕ですね、天井なしの海のそばの壕へ入りまして、敵の軍艦がそこまで来ていますから、敵兵の話し声も聞こえすからね、絶対に話し声をしてはいけない、とみんな口を封じて、一日そこですごして、翌日の朝、火焰砲を撃ち込まれたんですね。それは、出ろ、出ろといっていたが出なかったもんだから、やったんですね。それで三つになる子供が窒息してしまいました。幸いに、キユースの一杯水を持っていましたので、その水を飲ましたら命を取り止めました。

それでも出ないもんだから鉄砲で撃ち込まれて、わたしの主人は足を射抜かれるし、姪、これも二高女の一年でしたが、二年になっていたかでしたが、ここ(腰)をやられましたね。

この子はすぐ敵の兵隊がつれて行きました。兄がですね、今まで誰も怪我もしてないで、無事にすごして来たから、僕から出て見よ

を聞いたので会いに来ました。それで自分たちは志喜屋にいるから、叔母さん、志喜屋へ行きましょうというので、いっしょに出かけたわけです。志喜屋への途中で姪たちが、叔母さん、捕虜になっているのは大変だから、海に行つて溺れて死のうではありませんか、というんですね。それでわたしは、小さい子供たちもおることだし、一応志喜屋へ行って見ようよとなだめて、志喜屋へ行きました。志喜屋に二晩泊つて、病院が無いもんですから、百名にしか病院はないので、帰つて来ました。体中が腫れているもんですから、敵の兵隊さんが、お産だと思つてですね、お産婆さんやら、お医者さんやらつれて来て、いろんな食べ物を持って来て、お産道具も持って来たから、お産では本くて、お産はすんでおられるけれども病気でこうなつておるといったんです。じゃ二、三日いてごらんなさい、といつてそこに二、三日おつたけれども、それじゃ、あなただの薬はここにはないから、コザに行つてごらんなさいといつて、コザへまた、トラックで送られたんです。

兄たちは、もうどこへ行つたかわかりません。娘たちは、こちら(棚原部落)の人たちがいたので志喜屋に置いて、わたしは六つになる子供をつれてコザに行つたんです。コザでは、友軍の兵隊さんが気の毒がつて、菓を一瓶くれたんです。その菓を飲んで一週間くらいしたら、腫れも取れて大変よかったですけれど、友軍の兵隊さんたちは、僕たちは明日はここを引きあげるから、元気でなとおばさん、といつて別れたが、菓がなくなつたら、また起きても出来ないくらい腫れたもんですから、コザから宜野座病院へ移された。

あちらには半年くらいいましたけれど、宜野座病院は食べ物がない

うといつて、裸になつて出たんですね。みんな出なさいというからまず出て見よう。殺されても、どうなつても出て見ようといつて、兄がみんな、子供たち一人ひとりずつ引張つて出したんです。わたしの主人だけは、僕たちは教職にあるから、捕虜になつてはいかんといつて、手榴弾を三つ持つて、ですね、毎朝、起きたら、今日までかもしれないから最初に子供たち二人をやって、つぎは君をやって、最後に自分をやるから覚悟しろ、と毎朝そんな話をしていたんです。それで兄は、子供等が可哀想だから一応出て見ようといつて、わたしもいっしょに出したわけです。

それで出て見たら、上の宝山いっぱい捕虜でした。何百人ですね。その時、わたしの主人だけは出ませんでした。それでわたしは、あの時は、主人だけは捕虜にならなくて、よかつた、主人を逃がしてよかつた、思つたんですね。それでわたしは、荷物を取りにやってくれといきましたら、何も要らないからついて来いといつて、ですね。それで、いっしょに同じところにつれて行くだろうと思つたら、みんなバラバラにつれて行かれてですね。兄と、それから兄の子供で末から二人とうちの末つ子と四名は富里の方へつれて行かれて、わたしと六つになるわたしの長男の二人は百名へつれて行かれた。それから姪の女学生二人は志喜屋ですか、あつちにつれてゆかれて、それから正子という親戚の怪我した女学生はコザにつれて行つたその後できました。

それで一晩はそこで過しまして、兄はどこへ行つたかわかりませんが、翌日わかつて、わたしは、歩くにも大変ですし、動けないんですから、姪たちが志喜屋から、わたしが百名にいますということ

くて、大豆を水で炊いたのをですね、一粒ずつ食べて、命をつないでいたんです。水が欲しくなつたら子供に汲ましたりして、毎日大豆を食べて、誰か知っている人がいるなら、子供を預けるんだが、わたしは死ぬかもしれないからと思つて、知つた人をさがしたが、こちらには、知つた人は一人もおりません。何か、あの一人親戚が病気でいきましたが、子供の肩にもたれて、この病院をぐるぐる歩き廻っていましたけれど、一週間でよくなつたといつて、異つた病院に帰つて行きました。それでわたしたちは、知つた人はひとりもいませんでしたが、半年ぐらいいしてから体がよくなつたもんですから惣慶の避難小屋へ移されました。

そこで子供と二人、島尻にいる兄たちもどうなつたかわかりませんが、ぜんぜん音信不通ですね島尻と国頭と。知つた人一人もありません。わたしは寝たきりで、他の避難民はみんな作業へ出て、特配を受けていましたが、わたしは何もやれないもんだから、何もなくて、ひもじい思いをした。子供だけでも思つても、子供にやるものもない、敷くものもなく、茅と「裏白」の葉っぱやそんなものを夜は敷いて寝て、朝はそれを全部外へ出して干して、昼中は山へ行って、着るものも着たままで、そこでも四か月くらいいたと思えますけれど、知り合は一人もいませんので具志川行つてごらんと教えられた。

それで行つたら、そこに沖縄タイムスの豊平良頭先生がおられました。豊平先生は西原時代の先生でありましたので、この方にお会いしたら、先生は「気の毒だったな」といってワンピース一枚と、先生のシャツ一枚を下さいました。

シャツは木綿糸で縫ってあるのをほどこいて下着を縫って着け、洗濯する時は、ずっと山奥の川へ行って、初めに下着を洗って、それを干して、また着更えて、ワンピースを脱いで洗って、それが乾くまでは山の中に入っていて、一日かかりで洗濯をした。住むのは山羊みたようにしていて、そこでだんだん体を恢復して来たんです。

そのころ島尻から作業人が来ましてですね、あなたの兄さんたち島尻にいるよ、と聞いたのもんですから、このおじさんたちにお願いで、島尻と連絡しました。何か手紙出そうとしても、紙切れ一枚ないんです。鉛筆もないんですからおじさんたちに言つてをお願いします。そうしたら兄がつかれに來まして、また島尻へ一応帰って、そこから船越の方へ行きまして、あちらに二、三か月はいましたかね、あつちから棚原に帰って來ました。

島尻のわたしのいたところでは水がなかったもんですから、子供は朝早く起きて、木の葉の露ですね、それをなめさせて、こんな風にして過しておりました。

まだ捕虜にならない先の話ですが、兄に、わたしは皆の邪魔になる、わたしのために、皆が危いから、先に殺してくれと頼んでも、怪我もしないのに殺せるか、歩けるところまで歩け、子供のことを思ったら、どんなにしてもついて歩ける、そうしてわたしに艦砲も爆弾も当りませんでしたね。

主人はギーザバンタで、自爆したんじゃないかと思えます。それはわたしたちが捕虜になった六月十九日に。その日に手榴弾で自決したのでないかと思えますけれどね。二、三日してから、兄がそのゴーをさがしに行ったんだそうですけれど、それらしいのは何も無

壕の中にいたのは、棚原で捕虜になりました。

第一人は支那事変から帰っていましたが、また召集されて、伊江島で戦死しました。一人は友軍といっしょに戦死しました。末っ子は、栄養失調で、捕虜になってから死にました。妹は首里高女(県立首里高等女学校)を卒業していました。

わたしたちの兄弟は、男五名、女二人でありましたが、長男と長女のわたしたち二人は生きることができましたが、男四人、女一人の弟妹たち五名は、戦争でいなくなりました。

叔父さんの男の子、わたしのいとこですが、これはアメリカ兵にわざわざ軌き殺されたそうです。終戦直後の港灣作業に行っていたそうです、同じ部落のもの二人で。そうしたら、トラックを持っている米兵が、行ったり来たりして、他の子に突っ込んで来たので、その子は飛び退いて助かったら、今度は、いとこへ突っ込んで、そのまま軌き殺したそうです。わざわざだったらしいんです。作業に出ているのですが、捕虜はぜんぜんしなかったんです。

わたくしらの方は、姑、舅に、姉さんたち二人、主人の方は、七名の中、五名が戦争で亡くなって、二人だけ残りました。

伊波 ウト(三十六歳) 主婦

いくさは二度とやりたくない。十・十空襲で焼き出されて、わたしたちに二週間ばかり休ましておけといわれたので、わたしたちは、まだこんなに家はあるが、戦に追われて家のない人のこと思えば、わたしたちもいつかこんな日が来ないとも限らない、このよう

かったそうです。それとも海に飛び込んだんじゃないかと思えます。あそこはすぐ海でしたから、はつきりわかりません。

でもわたしは、夜はつれられて歩いて、昼は壕に引込んでいたのたので、戦争のことは、あまりよくわかりませんでした。百名まで捕虜になって行く時に、高台でありましたがね、友軍やら、避難民が死んで、ゴロゴロ転がっているのは見ました。地面いっぱい死んだ人が転がっているのですが、それを見ても何も考えないで、ただ歩いてばかり行きました。

わたしたちは、もとは東京にいたんです。昭和十六年に、二高女(沖縄県立第二高等女学校)の稲福校長先生に招かれて来たんです。埼玉の方からも招かれて、両方から来てくれといわれましたので、最初は埼玉へ行こうかといいたんですが、わたしの親元から、一か年でも二か年でもいいから、郷里の方へ帰ってくれないかというので、郷里へ帰って来たのでした。契約は二か年ということでした、それからまた他府県へ出るつもりでしたが二年はとくに過ぎて、四年になりましたが、そのままになって戦争になりました。

わたしの実家の方は、妹は石部隊について看護婦で、戦死しました。父は長男ですが、三男のわたしの叔父ですね、壕の中に家族は入れて、父と叔父が入口を守っていたそうですが、米兵が来て、出る、出るといったので、父と叔父が竹槍で立ち向かったそうです。

誰かが話していましたけれども、父は胸をやられて、担架に載せてあつちへ持って行きおったそうですが、叔父さんは、鉄砲で射殺されて、崖の上から投げ捨てていたそうです。それで二人ともどこへ行ったかわからないんです。

な日が来たら、どんなに苦しいだろうと思っていましたが、言っている中に、わたしたちもこの経験に当りました。

自分の家の隣りに防空壕がありましたから、この防空壕に入っただけで、家に廻って来ては子供たちに飯もくれて、隠れては、やっておいた間は何でもなかったが、自分の家も一度に焼き払われてしまいました。家といっしょにはありませんから四人の子供たちを一人ずつれて、防空壕ばかりにいらしているほかはありません。

四月二十三日、十七、八までの子供たちは弾薬運びの手伝いをしていました。これ等の子供たちが、各自帰されました。戦争は一週間で終るから、家族といっしょになって、島尻へ下って置けと言いつけられておるから島尻へ下るようにせよと、子供たちが連絡に來ましたから、一週間ならどこへでも行くんだといって、一週間の食糧を持っておけとの兵隊の話であったということであったが、それでも持たれるだけは持つことにしました。わたしは数え年三歳になる子を負ぶって、また一番上が十二歳になっていまして、これと下二人の三人が男の子で、末っ子が女でありました。

島尻へ越すことになりましたが、明るい間は弾は来ませんでした。日が暮れると敵の弾が来ましたが、それでも日が暮れまじったので準備をして、照明弾の明るく照らす時には、逃げ隠れして、一夜歩き通して、大里村役所のところへつきました。そこで夜を明かして坐っていました。

わたしたち兄弟は四人で、四家族で十六名でしたから、ひとところに、いっしょに、また隣りの人たちもいっしょに逃げて来たわけ

大里村役所の前で夜は明けましたが、わたしたちが休んでいるところへ友軍の兵隊さんたちが来まして、こっちは当分戦争はありませんので弾は来ない、そこがいい壕があるから入って置けといつて、平田というところの野砲陣地といつて作られている大きな壕につれて行きました、こっちで一か月くらい、せんぜん弾の音も聞こえない、こっちは、戦の音もないねといつて、いたんです。

そうして一か月目を過ぎた頃からは、アメリカがこっちまで来ていると騒ぎが起つて、早く逃げなさいといふことで、大里村平良から東風平へ逃げました。そうして東風平入口にさしかかりましたから、子供たちもしつかり負うて、また歩かして、人の家の門に来ましたので石垣の根に荷物を下して、休もうとしましたら、お前たちがそこに休むと、わたしたちの家はすぐに焼かされてなくなつてしまふから、そこに休んではいけない、といつて荷物も下してはいけないといつて、ほんとに追い出されて休ましてもくれませんでしたよ、この東風平というところは。

こんなに休ましてもくれませんところへ、警察の方がたが来られて、知念・玉城は日に二合の配給もあつて、あつちには避難民も沢山集まっているから行け、といふので、それでは米は誰がくれるかと訊いたら、アメリカがくれるといふので、自分たちはこっちにきていながら、わたしたちをアメリカのいるところへやろうとするのかといつて、警察の人たちと喧嘩して、島尻へ越えた。それから行つて、元の製糖工場その夜は泊つて、翌日は、大里(高嶺村大里、旧高嶺役所所在地)で休んでいると、その間にまたそこへ弾は来たから、今度はまた遠廻りして、国吉・真栄里は弾は来ないとい

て食うものもなく、のむ水もない。こんなにして死ぬよりは、うまい水を腹いっぱい飲んでから死ぬ方がいい。さあ、水の沢山あるところへ行こうと、兄弟たち揃つて話して、水のあるところをさがして行つたのが新垣といふところですよ。

それで新垣といふところへ行つたら、湧き水の出る大変にいい水があつて、みんな水を腹いっぱい飲んで、水筒を持っているのは水筒に入れて、一升瓶を持っているのはそれにいっぱい詰めて、もう今ならどこで死んでもいいさ、といつて、その新垣からまた出て、真栄平へ行こうといふことになった。その真栄平へ越えるところで、わたしは、足裏に柔かいものを踏んだんですがね、そうしたら小猫が泣くように音がするんですよ。それで見ましたら生んでまだそう間のない、生んだばかりのような赤ん坊なんです。赤ん坊を棄ててある様子ですが、それで翌日、あんなことだったが、どうなっているだろうと見たら、かたわらには女の親が射殺されて、それでその子を踏んだことを思い浮べて、身の毛がよだち、身慄いしましたよ。

この真栄平もアメリカが来ているといふので、国吉へ行きました。国吉へ行きましたらあつちも二、三日するうちに、またこもアメリカが入り込んでいふので、今度はまたここからも逃げなければならぬ。また真栄平に帰つて来て、人の屋敷の石垣のうちに茅で葺き出して、四家族で十六人でしたから、これだけ入つていた。こうして真栄平にいと、どうにもならない気持ちでありましたから、西原へ逃げようと思つた。

そうして歩き出したら、タカラニン(地名と思ふ)といひまし

うから、あつちへ行くとあつちの部落の人がとに言いつけられた。

国吉・真栄里に行くことだったが、あつちには行かないで、大渡・米須に行つて、米須では、また二日いる間に、また弾が非常に来たから、米須から摩文仁に行つたわけですね。それでそれだけ歩いたが、大里の平良では、四十円で芋畑のうねを買つて、一か月も芋を食べることができたのに、その後からは、売るところもないから、すべて盗んで、他人の畑から豆なども取つて、わたしはこの小さいのをつれていふから出かけて盗んで来ることは思うようにならなかつたが、わたしの十二歳になる子は、はしっこくて何かやつてのける性の子でしたから、豆など畑に行つてよくさがして取つて来ました。

それで、わたしは三男の妻ですが、長男の妻の姉さんがいましたので、わたしの子供がよくあちこちから集めて来たものを煮ました。わたしは三人の子供を泣かしてはいけない、泣かしたら大事といふことでありましたから、この子供たちを泣かさないようにするのでも一生懸命であつたわけでありませう。

米須に追い廻わされて行くまでは、食べる物はありませんが、朝も芋二個ずつ、十二時には一個ずつ、夜は畑が見えなくなる時から煮て二つずつ食べておりましたが、摩文仁に行きましたら水もない、芋もない、青い物一つない。摩文仁といふところは、禿げ土地になつていふので、芋もできません。わたしたちは子供ばかりだから、余所の男の人たちが掘つて取つてしまつたところから、芋のつるを拾つて来るのを、それを飯盃に入れて腐つたあまり水で煮て、つきくだいて、ほんのちよびりずつ分けて、まあこんなにし

たが、両方からはさみ打ちされて逃げるのができない。ここでわたしの九つになる次男が背中を撃たれて、持つておるタオルで洋服の上からしぼりつけてやつて、しぼられたまま、それがわたしと別べつになつていなくなつてしまいました。子供たち大きい方三人が。わたしは背負っている子供をそのまま背負っているが、この大きいものたち三人が別べつになつておるので、これ等三人をさがすために夜中、もんべが引つ切れるまでに転んでは起き、起きては転びして山の中からあつち行つたり、こっち行つたりしても、さがすことができない。

そうしてわたしが歩き廻っている時に、友軍の兵隊に引つ掴まえてられて「スパイ」であるといつて、やられたんですが、わたしは真栄平から中頭の方へ行くつもりであるが、敵の弾が激しくて行くことができないので、また真栄平へ戻ろうとして歩いていふが、道に迷つて、自分の子供たちも親戚といつしよになつて、三人と別べつになつたのでこれ等を捜がすために騒いでいふので、何もスパイなんかではないといつたから、それでは真栄平のどこへ行くか、といつたから、真栄平の後の山だといつたら、それではどの道を行くのだと教えてくれた。それで教えられたように、さがして行つて、夜明け方にはこの子供たちに行き会ふことができましたね。

この夜わたしと別べつになつたから、一番上の方が数え年の十二にしかなりませんが、叔父さん、わたしのお母さんをさがして来てくれといつて、すごく泣きがついてた様子ですよ、二人のおじさんにすがつていたそうです。そうしてわたしが元いた壕へ行くと、これ等とあつて、大きく呼吸を吐きました。その時は、子供たちも安心していましたが、わたしは元の壕をさがしたので迷

って、これらと別れわかれになった。もうその時のことを考えると、子供たちの大きい方は自分自分でおじさんたちについて歩けたでしょうが、四つになる小さいのを兄がつれていたので、これ等は、これをつれては逃げることも出来ないし、非常に心配しましたが、幸い朝になって会った。もうその時から、四つになるのと、自分が背負っているのとは、どこへ出るにもつれて行くことにしました。それは、われわれ三人は死んでも、大きい二人は、一人は十二になつてゐるし、一人は九つだから、道から歩いて、一人は死んでも、一人は助かる筈だからと思つて、歩く時は、大きい方二人は、ウチユルチエービーターンが（勝手にさせてあげました）が。

そうして、あそこは何と、いまいしたかな、そうです、具志頭、具志頭は敵がいけないというから、具志頭に逃げようね、とこの壕から出て行ったから、今度はまた、敵が入り込んで入れないといつて、摩文仁バンタといつたかな、木麻黄の中だったが、そこに一日隠れていたら、まあ、初めてアメリカというのを見て、自分の体をつねつても自分の体のようにない、下の土の中にもぐり込んでしまつて自分の体があるようにない、アメリカというのを初めて見て、敵というものを始めて見て、ほんとに戦さというのとはこんなにあるのかなあ、と思つて、自分の体があるような気持ちはなかったですよ（米兵を初めて見て仰天した様子）。

そこにいた時に、わたしたちも手榴弾を三つ持っていました。同じ部落のものが十四、五人ばかりいましたが、アメリカに見つけられて捕虜なるよりは死ぬ方がいいので、わたしは死のうと思つた。わたしは、元の入っていた真栄平の壕へ行きました。壕といつても、人の家の門の石垣で囲われている路次であつたんですよ。そこへ行きましたらわたしは、長男と三男は防衛隊につられて行つて次男と四男は家に残つていましたから、次男叔父さんが、「子供たちよ、こんな遠くまで来たのも、成るべくは生きよう、どうしてもしで生き抜こうといつて来たことだが、前に行くこともできない、後へ戻ろうとしても戻れない、ここが最後だから、お前たちは八十八歳まで生きたくもありません諦めなさいよ」といいました。

子供たちは輪をつくつて、子供たちも頭をうなだれて泣いている時に、六月の二十二日、米兵は「九時までに出て来ないなら砲撃を打ち込むぞ、どんな教育も立派にさせて、アメリカが面倒見るから、今出て来い」と真栄平の後の山で呼んだ。わたしと、十七歳になる娘とは絶対に出ない、殺されてもいいから出ない、子供たち四人もつれるといつたので、長男の嫁姉さんが、「お前たちは死にに来たのか」というから、「成るべくは生きるといつて来た」といつたから、「それでは、生きるといつて来たのなら出なさい」とこの姉さんがいふわけですよ。

「それなら、あなたから出て見なさい」といつたら、その姉さんが先きに出て見ました。そうして「後は運動会の見物人くらい人が出ているよ」と姉さんがいつたので、「それでは見て見ましようね」といつて見たら、まあ、兵隊たちは禪一つかけただけで丸裸かになつて、手を上げて出るし、また避難民たちも行列をつくつて出ておつた。「もうねえ、やすちゃん、こつちで死ぬよりか、あんな沢山の人の死なぬ方がましだよ、さあ出よう」といつたんですよ。

が、お前たちは死ぬかといつたら、ほかの人たちも死ぬという。それでわたしは、子供たちを集めて、家族五人なら一個で死ぬるときに死なして、わたしは死のうとしたら、わたしも死ぬ、わたしも死なして、手榴弾をいっしょにして持つて来るから、とみんなすつかり決心していました。わたしの姪にやすちゃんという娘がおりましたので、おい、やすちゃん、早くやらねば、アメリカが来るよと出来ない、早くやれ、といつたら、これはほんのちつとの間でできるから待ちなさい、死ぬのは早いからといつて、この娘が待たし待たして、それでは待つていたら、このアメリカというものは、英語だから何を言っているかわからんが、大きく呼びかけては逃げて行く、そうしてこのアメリカが行き戻りしている間は、一つも弾は来なかつた。

その時、このやすちゃんは、川のちよつと底のくぼみがあつて娘たちといっしょに坐つていて、またわたしたちは、そこよりも下にちよつとした、くぼみがあつたので、そこに坐つていたら、ミーカキチ小（屋号）のおばさんよう、あの方がねえ、やすちゃんよ、少しづつお尻を寄せ合つて、わたしもそこに入れてくれないか、といつたので、「お坐りなさい」といつて、このやすちゃんは立ち上つて、このおばさんを坐らしたら、まだ坐らないうちに、頭を撃たれて、でも亡くなるような怪我ではありませんでしたよ（坐つた人、宮里ハルさんという方の由）。

そうして、その一日辛抱してこの手榴弾を使わなかつたら、アメリカたちは、昼中は蘇鉄畑にテントを張つていたので、五時頃になつたら、それをたたんで行つてしまつたんですよ。それでわたし

が、このやすちゃんは出ないといつて頑張るんですよ。それで、「お前はどうかするの」と訊いたら、「アメリカへ石や何かを投げつけて反抗したら、自然にあらが殺す、アメリカも石で痛めてから殺されるなら殺されて死んでいいんですよ」といつてこの子は、なかなか諦めなかつた。それでもみんな、「同じ死ぬにしても、あつちに出てみんなのところ死ぬ方がいいよ」となだめすかして、上の山に出て捕虜取られました。

こうして捕虜に取られましたが、戦さの中から歩きながら死ぬのは覚悟はしていましたが、死ぬ時に見苦しい死に方だけはしたくないと思ひます。それは女が、そこ（下腹部）をまる出しにして大きく開いて死んでおるのがあるし、また死にそこねて「わたしを死なして下さい」と溝に入つていて、頼むのがあるし、兵隊で道具でも持つていると殺すことも出来るが、自分たちには、殺す方法もないから聞かん振りを通らうとすると、殺してくれないなら、古い着物があるなら被せてくれといふものもありませんね。戦さは、これを考えると、ないのでなければならぬと思ひました。そうして真栄平の後の大変な広い平坦な場所でしたが、アメリカは、わたしたちが行くと、じきにガムやら、罐詰やら何やらくれるのですが、みんな持ったままで食べない。われわれが食べないので、自分たちであけてから食べて見せてから、食べれという。それで子供たちは食べるが、大人は食べない。

この十七歳になる娘は、ここで捕えられている娘たちの中では、目立つて顔立ちが整つて美しかったんですよ。それでアメリカた

ちは、みんなこの娘のところへ来て、お菓子などもくれるし、雑話も抱えさす。この娘はそれを取っても、顔をせんぜん上げない。アメリカがいなくなった時に、わたしは娘のそばに行つて、「船に乗せるといふから、船に乗せるなら、近くではやらないで、遠くにしたら、ひとところに集まって乗るんだよ。これらが船出したら、沖に出てから、飛び込んでいいから知らん振りして、あつちで飛び込むんだよ」といつて、話をきかしておりました。そこから高良の上へ、おるだけ集めて、それから目取真に收容所がありましたので、目取真につれられて、目取真で少し休んでから、百名に一夜泊りました。そうしたら、自分の好きなところへ行けというので知念へ行きました。

捕虜取られてからは、物は配給は皆沢で、着物は沢山あつたから、壕から子供をつれて歩いたのが苦しかったので、捕虜取られてからは食物の不自由といつてはなかつた。

子供たちをつれて歩いている間は、お前たちの子供に一人は泣き虫がいて、泣いてばかりいる。それがために居るだけの者を殺させる考えか、泣かすな、そとへ引きずり出せ、と言われたが、それでタオルで口を押し込んで泣かさないようにして、大変苦しかったんです。それで子供のいない人は、自由に、自分の思うままにしていたので、ウーグトヤー（幸せだな、いいねえ）と思つていました。もう戦争も終つて、悠ゆうとなりましたから、この子供たちが、苦勞して生命をしのがして来たが、その時の難儀は、無駄にはなつてないなあ、と思ひまして、今は幸福です。

背中に怪我した子も運がよくて、皮を引っ張らして、左から入つて兵隊で助からないんだから、ここで死ぬんだといつて、出なかつたそうです。

この米須の壕は、大きな自然壕であつたそうですが、米須の部落の人も、出て行かないで、ここで、ずい分沢山の人が死んだそうです。

この子は、この部落の屋号が、三男大殿内といいますが、姓は今ちょっとわかりませんが、かめちゃんと呼んでいます。あの木麻黄のところで頭を撃たれた宮里さんも、このうちの隣りになつておられますよ。

米須の人はですね、出たのはほとんど見なかつたが、壕に残つたのは沢山の人であつたそうです。

自決しようと言ひ出したのはわたしで、やすちゃんもどうしても自決すると言つて、次男兄さんが、子供等にも言ひ聞かしたわけです。真栄平の壕です。壕といつても、道のそばの木の根っここのころであります。

わたしは三男の嫁であります。次男兄さんはわたしたちといつしよに歩いて、自分の妻と次女は直撃を受けて国吉で一週間ばかり前に亡くして、長女のやすちゃんが残つていたわけです。やすちゃんは、現在元氣にやっています。

長男兄さんは兵隊に行つていますので、兄さんの奥さんのわたしたちの一番の嫁姉さんが、子供を四人つれてわたしたちといつしよだつたんです。

わたしが自決しようと思つたのは、夫が死ぬことになりまし、以心伝心ですが、死ぬことをちつとも恐くなんありませんでし

て右に出ているが、入つたところは小さいが、出たところは大きいんです、疵が。直径が十センチくらいですかね。

この十七になる娘、やすちゃんは長女ですが、やすちゃんのお母さんと、十三になつてた次女と二人は、直撃を受けて、国吉で亡くなつてしまいました。

それからわたしの末の女の子と、四男（義兄）の長男と子供二人が、真栄平で、早く出て来いと呼んでいた時に、ぐずぐずして知念へ行つてから亡くなりました。ガス弾を吸つたので、この子供等二人は、ひどい熱が出て、下痢がつづきました。熱は二日くらいで止まりましたが、下痢は最後まで止まりませんで、二週間くらいだつたと思いますが、二人ともいつしよに死にました。年も同じく、数えの三歳でありました。

わたしの夫は、帰つて来ませんでした。米須で亡くなつたそうです。主人たちといつしよだつた女の子から、夫のことを聞かされました。二十八日の朝の八時か九時頃だつたそうです。六月の二十八日です。

アメリカがその壕から全部出て来いと呼びかけたそうですが、十時頃にはガソリンのドラム罐を持って来て、火をつけられたそうです、その壕で。

それは宜野湾の人でしたが、この部落に嫁になつて来ています。その子がうちの人たちと同じ壕にいたそうです。

それでアメリカが呼びかけたので、うちの人たちが、あなたたちは女だから殺しはしない筈だから出なさい。わたしたちは、どう

も。手榴弾を二つ持つていましたし、それで子供三人と一思いに来ると思つていました。

やすちゃんは、前にお話ししました通りアメリカ兵に石でもぶつつけてから殺されると頑張りましたが、嫁姉さんに言われて、みんなが捕虜になるのを見たので、わたしがやすちゃんに、それをいつて、こんなところで死ぬより広いところで、みんなといつしよに死ぬ方がいい、となだめすかして出るようにしました。

いつしよだつた人では、わたしたちのお父さんと、長男兄さんが養子に行つていられるうちのお父さんも亡くなりました。十六人のうち六人は亡くなつて、十人は帰りました。

わたしたち西原村の上の七個部落は、西原に集団生活しないで、知念からすぐ自分の部落に入りました。

城間 英吉（三十四歳） 隣組班長

どうしたのか防衛隊に一旦召集されたんですが、不合格といつて戻されて帰つて来ましたから、隣組班長を言ひつけられました。

それで、西原村の隣組班長の幹部会がありまして、その常会で、隣組の壕をつくること、早く防空の準備をしなければならぬといふことになりましたので、隣組の防空壕をつくらしました。

またわたたくしは、隣組の壕のほかに、自分の壕を個人で作ることにしました。しかし自分が掘つてあつても、自分たち一家族だけ入つて、他の方は入れないといふわけにはいきません。また隣組のあちこちの家でも自分自分の防空壕を掘りました。

そうしたらまもなく空襲がやって来たのですが、戦争の味を知らない隣組の人たちは、豚を屠ったり、飯を炊いたり、そうして豚肉のスキヤキをして食べるのを楽しみにしているあんばいで、それで煙を遠慮なく出していたわけです。

煙を出したら敵に発見されて弾を落されるので、そうはしないようにしなさいと注意をされましたが、その翌日でした、言った通り、艦砲が一斉に落ちて、甘蔗畑は全部燃え上って一面真黒く焼けてしまったんです。その後からここを目標として、ドンドン艦砲が撃ち込まれましたから、木もなにもかも、鬱蒼としている木も、すべてが吹き飛ばされてなくなっていましたよ。

そうしたらわたしは、自分の家の木の下に防空壕があつて、奇麗に掃除もありましたが、危いと思って妻子をそこにに入れておきました。そこへ越来村の人、読谷村の人も来ましたので入れてやりました。

そうしていたら、島尻から、球部隊の兵隊がやって来ました。それで、隊長でしようね、日本刀をさげていましたから、指揮しているのであつたでしょうが、「お前たちは、この壕から出る」といいました。出れと言われましたので、「わたしたちは子供もこんなにいるんですから、壕は沢山ありますから外に考えて下さい」といったんです。そうしたら「君たちはみんな死んでもいい、兵隊は一人でも死んだらどうするか、君たちの戦争ではないか、きかなければ殺すぞ」といって、日本刀を抜いてわたしを殺そうと構えていたんです。それで、「ああ、そうですか」といって、わたしたちはみんな出ました。

弾が、まるで雨のように落ちるので、地面にポッコイ、ポッコイという音を立てて、土の中に入り込むのもあれば、破裂して音を立て煙を巻き上げるものもある、人間などそこにも見えないう、そういう風にして落ちていました。これではどうにもならん、防ぎようがない、とうてい行かれはしない、と思って前田へ戻って行きました。

その時ですが、銘苅（屋号か）の前の道に、髪を長く生やした狂人がいました。この狂人は狂人だとみんなが知っていました、その前の道に、黒で筆太に、「スパイの疑い」といって紙に書いて、石で被うてありました。これは友軍がやった筈です。

それからわたしは、また引き戻って行ったら、その翌日だったので、前田も艦砲が飛んで来て、わたしたちがいるところも、バンバン撃つて来るわけです。そうしたら、こっちの家畜は全部吹き飛ばされてなくなっていました。それから、艦砲が、こっちは落ちなくなりましたので、親たちは、ナーシヌギシヌギンチ（各自めいめいで危険をしのぐのだといつて）家族全部逃げておりません。わたしたちは赤ん坊も前にしていますので、準備がおそくなつて、逃げ遅れてしまいました。そうしたら艦砲はまた激しくなりました。それでわたしは、親たちが、自分たちだけのげばいいといつて、逃げないのが腹立たしくなつて、ナーハンシハンシ（自分自分のがれるんだ）だ、と思っていました。

弾がバンバン落ちるので、ここに止まっていることはできないと思いましたが、わたしは戦争の経験で、大概わかっていますから、ドンドン落ちる弾をよけるために、野原の端を一直線に躍進し

その分隊長らしい日本刀をさげた兵隊の当番だっと思いましたがね、「あなた方煙草ありますか」といったら、「もうしばらく煙草は吸っておりませんで不自由しています」というんです。わたしは煙草は吸いませんし、「配給を取ってありますから、これを上げました。当番兵は、わたしを日本刀で切ろうとした分隊長へやりました。そうしたら、その分隊長は、今までは打って変つて、煙草を二個やっただけで、すっかり喜んで、「君たちはこれに入っていないなさい」といいました。わたしは「有難うございます」と答えて御礼をいいましたが、ここは危険だと思つて、妻の実家の浦添村前田へ行こうと考えました。

妻の親のある浦添村前田には、軍の食糧が沢山置いてありますが、そのそばに墓があつて、兵隊たちが入っていました。そこは妻の実家の近くでした。それでわたしは、まず一人で妻の親元を訪ねて、妻子をここへ連れて来たいといつたら、つれて来いというので、すぐに妻子をつれに戻りました。そうして妻子を、妻の親たちのところへつれて行きました。

それからまたわたしは、叔父さんや叔母さん方もみんな自分の部落にいたからなあと、部落へ戻つて皆に会い、皆元気の姿を見て、もし危くなつたら避難するように言つて、また妻子のいる前田へ戻つて行きました。

一日前田にいと、また自分の部落をもう一度よく廻つて見よう。支那事変に行つた時の兵隊での写真帳も放つたらかしてあるし、従軍徽章なども取つて来なければならぬからと思つて、浦添から西原入口まで来ました。そしてこの棚原の前を見たら、艦砲の

て前の安全なところへ皆を移すことを考えました。わたしが手を招いたら、一人ずつ出て来いよといつて、妻は赤ん坊を抱いて、小さい長男は、七つになる長女に負わして、まあ、転ばないようにいそいで来いといつて、弾の落ちるところは匍わして、そうしたから弾にも当たらないで、逃げる事が出来ましたよ。

そうして今の二号線、首里の石嶺へ行つたんです。そうしたら思ひ出しました。米も金も前田に置き忘れて来ているんです。それで、お前たちは、前に行つておれといつて、安全なところへ待つているようにいつて、またわたしは急いで、戻つて行つたんです。その時は、今来た道も、ボンナイボンナイ艦砲（ひっきりなしに落ちる形容）は落ちるんですから、当たらお終いです。その艦砲の中をくぐつて行つて、お金を持って、お米を担いで来ました。家族たちも、ちゃんと待つていてくれて、いっしょに下りました。

その時はちょうど十時頃になっていたでしょうね、識名に着いたわけです。識名の墓のそばに着きましたから、こっちは墓の口があいて友軍がいましたが、そこにくついています。

翌日になったら、隣りに、西原の隣り部落の翁長の人たちが墓を開けて入つておりました。あなた方の墓に入ることはできないかと訊いて見たら、狭くて駄目だから、この隣りの墓は、まだ花もあつて、亡くなった人が入つてからそう長くはないようだが、それを開けて入つたらどうかといわれたので、そうすることにしました。

墓を開けましたら、まだ腐れていないけれども、それを奥の方の段に上げて、そこに入りました。この翌日、翁長の人たちが

のおおるところに、八十歳ぐらいのおばあさんが、孫たち三人つれて来ていましたが、その中の長男は、肩を打ち砕かれて、汁がせーせー（じくじく）しているし、うぢ虫が白くちよるちよるはっついていました。それでわたしは可哀想になって、墓をさがしてやりました。

これも人が残してあるのだから、人が亡くなってまだ間もない新しい棺で半分ぐらいしか腐っていなかったでしょうね。それで入っていないなさいといったら、おばあさんは、孫たちに入っていないなさいといつてから、味噌と米を西原役所の前の塚に置いてあるから、この女の子は一人つれて行って、これに持たして来るといわれる。

わたしは、行かないようにおばあさん、わたしが芋でも掘って上げますから、行かないようになさいよ、とわたしがいって、いいえ、取って来るから、あなたでこの子たちを見て下さいね。またこの隣りに自分の部落の人もいるから、この二人の子を見て下さいといわれる。それではよく気をつけて行っていらっしやいといった。それで行かれたが、そのおばあさんたちは、出て行ったまま、帰って来られない。二、三日たっても帰って来られない。

それで二人の子供は、「おばあさんよ、おばあさんよ」といって泣き通しているんです。そういうわけで、わたしは芋をあさって来て煮て、一つ二つくれたり、識名園の池から水を汲んで来て飲ましたりしていましたが、この隣の塚に同じ部落の人がおりました、どうしておばあさんをやったかといつて、わたしは叱られました。その子供の肩が腐れて、虫も出て、ほんとに臭いんですね、近寄りもできない状況でした。早くどこかへやらないと、臭くてお腹

の子供たちも帰したので、島尻へ自分たちは行こうかなという考えも起っていました。

しばらくすると高射砲隊の兵隊が来て、高射砲を据えつけることになって、いよいよ据えつけてしまったという時でした。わたしたちの墓の前に艦砲が落ちたんですよ。わたしは平たい石で塚の入口を囲ってあったのに、この平たい石も二つにたき割ってしまつて、次女の耳の下がやられて、血がひどい勢いで流れ出たんですよ。

その時五歳になっていたんですがね。その血を止めてやったら、今度は赤ん坊がちっとも泣かない、動きもしない。これは駄目になったのではないかと、目を見たら、白眼を出して死んだようになっていた。気絶しているのだから、足を引く掴かんで逆さにして振つてやったら呼吸を吹き返しました。そうしたら、偶然に、妻方の前田の塚にいた一組が、少し上の方にいたわけです。

「お前たちもこつちか」「うん、わたしたちもこつちにいたが、今艦砲に当って、こんなになってるが」といったら、「大勢いる方がいいからみんなこつちへつれて来い」というので、そこへ行きました。そこからは、首里城がよくわかりました。それで夜昼の差別なく、艦砲がバンバン、石も粉を吹いて空に巻き上る、それが識名からよく見えるんです。

そうしたら、晩方でしたが、牛島中将閣下方が通って行ききました。牛島中将閣下や幕僚たちは前になって、それにつづいて女学生たちが、防空頭布を被って、甘蔗で杖をついて、布呂敷包を肩から斜めにかけて、一列並びで、大体一間離れの程度の距離をとって、移動して行きました。わたしは今考えると、葬式みたいで、

痛を起させるとか何とか、ずいぶん雑言小言ですよ。わたしは聞かぬ振りです。自分の部落の子供たちも世話してくれないと、わたしは腹立たしくはありましたが、子供たちが可哀想になって、おばあさんは帰って来られるから泣かないでね、となだめていました。しかし四、五日経っても帰って来られない。

後は、「棚原のお父さんよ、棚原のお父さんよ」と大声で泣くわけですよ。自分の部落の人がさえ、立ち寄ってもやらないのと思つて、しばらく出て行きませんでした。そうしたら泣き止んだので、わたしは気の毒になって行って見ました。

そうしたら、大変大きなハブがはい廻っていたという、ハブならハブとおっぱらえばいいのにお前たちは、といったが、わたし、自身が泣き出すぐらい何だか気の毒な感じました。そうして、そのハブはどこへ逃げたかといつたら、あの前の岩の穴に入つて行ったという。いくらさがしてもハブは見つからなかった。

そうこうしていると、この二人の子供は、わたくしには何も言わないで、出て行く、下の子はまる裸か何も着ていない、上の子は肩の化膿がだらだら垂れている。それでどこへ行かと言つたら、おばあさんを捜しに行く、という。行くな、というが、どうしてもおばあさんをさがしに行くというので、仕方ないので、三、四百メートルぐらい、つれて行って、道を教えてやっただんですが、わたしはしばらく立ち止まって、見送っていました。そうしたら、艦砲が音を立て、わたしの横の近くを通って行きました。もうほんの少しでわたしはやられるところでしたよ。しかし、人間の運というのは不思議なもので、何の怪我もなく、無事でありました。それでこ

司令部の人たちには一人も物を言う人はなく、みんな頭を下げて行きました。その時からはもう艦砲も落ちませんでした。雨は小雨が降る中で、その移動は実際に、哀れに思いました。この牛島中将の首里からの移動の様子は、ちよと葬式みたようでありました。そうしてその行列は三百人ばかりついていましたが、その中には、沖繩の人がおるかわかりませんでした。全部すつとつづいていきました。

それでわたしたちもどうしても南部へ越さねばならないと思つていました。翌日からは機関銃の弾が、まるで雨のように打ち込まれて来ました。前田の塚にいっしょにいた連中もこれではどうにもならんといつて、いっしょに南へ下ることにしました。

そうして下つて行きましたら、一日橋を中心としたところは、まるで死んだ人の山でした。死んだ人間を積み重ねたように倒れていました。その死人をよけたり踏んだりして津嘉山へ行つて、そこを通り越して東風平の当銘・志多伯へ入つて、一つの家に入ろうとしました。その家主が絶対に入つてはいけないといつて、拒みませんでした。あなたたちが入るとわたしの家は焼かれて無くなるといふんです。それで少し、わたしが強くいさせてくれといつたもんだから、いきなり平手打ちを一回だけでしたがくれました。七十歳に近い老人でしたが、気の強い人のようでした。そうしてそこへ糧秣係りの兵隊さんが来て、わたしたちの様子を見たのか、家主に、今は戦争だし、このようにみんな避難しているのだから、家をかさないといふことはいけないと叱られていました。

しかしわたしたちは、この家にはもう面白くないので入りません

で、ずっと歩き通して摩文仁まで行きました。そこで妻の親たちと
いっしょになりました。

摩文仁では、まだ家がありました。わたしは本家に入るんだとい
ったのに、妻の父親は私の強い性格で、どうしても前の離れに入る
のだといって、とうとう分れて入っていました。そうして妻の親た
ちが、離れに入ってももの十五分ばかりも経ったでしょうか、その
前の軒き近くに爆弾が落ちて、その建物は引っくり返されて、みん
な家に圧されてしまいました。妻の親から、叔父から、仲本小とい
うのから。仲本小は頭を割ってしまって、妻の親は腰骨を折って
しまった。叔父は茅葺き家の椀竹で手を抜き通されてしまった。そ
れで仲本小と叔父は手拭で疵をしばってやって、妻の親は腰骨を折
ってあるのだからどうも仕様がな。わたしはどうしようかなと心
配になっていろいろ考えたが、いい考えは出ない。しかし、食うも
のを考えねばならないので、まず食い物がしに行つた。あちこち
の壕など歩いてみると、たまたま大豆がたくさんあるのに行き合っ
た。わたしはそれを沢山、持てるだけ持って帰った。

しかしこの摩文仁の部落は水がない。海岸に行けば水はあるが、
そこへ行くと全部敵の弾で殺されて一人も帰っては来ない。そこへ
水汲みに行くのは殺されるに行くのであるから水らしいものはないか
と歩き廻った。そうしたらコンクリートで作った池があつて、それ
に水があつた。しかし底に泡を出して腐っていたが、仕方がない。
これでも汲んで、大豆を煮て見ようと、大豆に米を少し入れて、味
噌も少し残っていたので入れて煮てみんなにやったら、皆、腹は空
っぽでひもじくしているの、うまい、いいことをしてくれた、と

いけないよと、わたしはその連中をやって、わたしは三人の母子を
つれようと待ったが、この母子はその小さい壕にいて、
いっしょに行かなかつた。そのため、この母子は艦砲で、三人一
度に亡くなつてゐる。

わたしは喜屋武・福地へ行くと、お前たちはこつちにいなさい
よ、わたしがあちこちしらべ、いるところを見つけて来るからと
いって出かけましたら、大きなガジマルの樹がありましたよ。わた
しは荷物をそこに置いて、居どころをきめてありました、このガジ
マルの樹の根もとに。そうしてわたしたちが揃って行ったら、そこ
には、若い女たちもまじつて十四、五人の人が場所を占めて坐つて
いました。防空頭布を被つて、一見して首里・那覇の人たちとわか
りました。何か気まぎれのためか裁縫しているのもおりました。そ
れでわたしは、荷物も置いてありましたから、「そこはわたしたち
が初めに取つてあつたんですがね」といっただんです。そうしたら
「戦争中にも誰が取つてあつたといつてあるか、わたしたちの勝手
だ」といって。それでわたしは、「そうですか、それならわたした
ちはあつちへ行きましょう」といって、置いてあつた荷物を取つて
行きました。

それから四時間ばかり経つてから後だと思ひます。そのガジマル
のところへ、爆弾でしようかね、直撃が落ちたんです。その那覇の
連中と見えた人たちの中へです。そうしたら全員がすっかり吹っ飛
んでしまいました。引つ切れた肉がガジマルに下つていたり、引っ
かかつていたり、人肉の碎片がくっついていたりしているわけ
です。銀蠅もすぐに集まってブンブンたかかっています。七つぐらい

みんなに襲われました。

摩文仁の牛島中将閣下の行っている丘は、艦砲で、真白くなくな
りましたが、女学生たちは、バラバラ降っている弾の中から歩いて
いるのを見ました。

それから、こつちにもおられないから、といつて、また他の方へ
行こうということになったが、妻の親は腰骨を折つているので歩く
ことができない。それかといつて、ただ放つたらかしても置けない
ので、いい壕をさがして、そこに置いて、またつれに来ようと、壕
をさがしにと、いいなだめて、そこに残して越えて行きました。今
のひめゆりの塔の前は小松林ですが、妻の父親のことが考えられ
て、心が忍ばれません（気がすまない）ので、ひもじくしている
だるうから行つて見んと、いかんと思つて行つて見たら、「わた
しはもう癒つているよ、お前が来たから癒つているよ」といふ。そ
れで、ひめゆりの塔の松林の中に親をつれていって、甘蔗畑の中
一晚おりました。そうすると、また夜中に、そこへ艦砲が落ちまし
た。みんな土を浴びただけで怪我はしません。

艦砲が落ちたので、こつちもいられないので移動しようといふこ
とになった。その時、女親と子供二人、女親は摩文仁で怪我して、
子供を産んでいる女だが、痛いといつてお母さんよう、お母さんよ
うといつて泣いてばかりおる。それで、前田の壕にいた連中は、こ
の泣いてばかりいる母子をいっしょにつれて歩くと、あとにはわれ
われも大変だ、つれて歩くのは面倒だ、放つて行こう、そうでない
とわれわれも死ぬことになるから放つたらかして逃げようといふ。
わたしは、それはいけないよ、つれて行こう、同じ仲間を捨てては

の子供がまだ半焼けみたいにくびく動いているのもおりました。
それを見て、自分たちは、運がよかつたとしみじみ考えました。
そこはわたしたちがいたところは十二、三間しか離れておりませ
ん。わたしたちは人の屋敷の石垣の陰におりましたので、誰一人も
怪我もありませんでした。その人たちと競つてそこにいたら、自分た
ちが全滅するところでした。やはり運というのがあるかと考えまし
た。

それからわたしは村はずれに行きました。用便のためです。それ
といふのは、この福地部落は、どこということなく人間がいっ
ぱいで、いわば芝居見物の人のように、あつちにもこつちにも人が
坐つて、用便もできなかつたのです。それで、部落はずれの畑に行
つて用便しようと思つたわけです。そうしたらその畑は、大変な死
人です。兵隊が三、四十人も死んで倒れています。

一かしよに三十人ばかり死んだ兵隊が倒れたすぐそばに、女が一
人います。二十歳になつていたのでしようかね、右だつたか左だ
つたかは憶えていませんが、足が股から切れて動くことができない
んです。生きてはおるが、歩くことはできないで倒れていました。

姉さんはこの人ですかと訊いたら、中城村の南上原というんで
す。南上原といつたらすぐそこですよ（棚原部落から）。名を聞い
たら米須だといつていました。米須の一門の娘だつたんですね。兵
隊が死んでいるそばだから、銀蠅がひどくたかかつて、それを手で払
つていました。何ともいえない可愛想な有様ですよ。「姉さん、わ
たしがどうすることもできないから、ごめんなさいね」、といつて
そこを離れて、用便をすまずと、わたしは家族のところへ帰りまし

た。

そうしたら、わたしがそこへ来ていることを聞いて来たといつて、同じ棚原のメーンチ小(屋号)の太郎兄と、デノーヤトテブクのお父さんが来ました。

「城間の英吉兄さんよ、この戦争は敗ける方がほとんどでないかなと思うがどうか。見ていて、兵隊も避難民も、一度に十人も二十人も三、四十人も吹っ飛ばされて死なされてしまう。宣伝ビラには、裸になって、センデンビラを持って来たら、助けてやるから来い、とあるから、わたしは捕虜になろうと思っっているんだが」といいました。わたしも「それではそうして、一時も早く捕虜になろう」ということになりました。腰を痛めている妻の父親は杖をつかして、前田での壕の組の人たちも、それでいいということになつて準備していると、周囲の人たちは、わたしたちもつれていって下さいといつてあちこちから言つて来ました。「わたしたちは、殺されるなら、ここで艦砲で殺されるのも同じだから、殺されてもいいと思つて、殺される覚悟で行くんですよ」といったが、他の人たちも、「わたくしはそれでもいいからつれて行って下さい」といって皆行くことにしました。それでわたしたちが先頭になつてそれはもう晩方でありましたが、糸満の手前の名城へ行きました。そこへ行った時は、日が暮れて、夜になりかけていましたが、その兵隊や民間の人たちの死に方は、死んだ人を踏んでその上を通るぐらいで、腹も大きく膨くれて、臭もひどくて、何ともいわれませんでした。

それから名城部落も越えて、岩のあるところに来ましたので、そ

飯をつくったりしていたことがわかりました。

それからしばらく行くと、川があつて、アメリカが橋をかけていたが、そこに止められたから、こつちで皆殺しするんだと、誰かがいい出したので、皆驚いてしまったんですね。わたしが、ここはもうアメリカに取られてるんだから殺しはしないといったんだが、娘さんなんか逃げ出そうとして、一人は海に飛び込んで、一人は畑に逃げ出したので、すぐ銃で撃つて殺して、二人で海に放り棄てました。

そうして橋が架け終わったので皆通して、潮平・兼城の鉄条網の中に收容されました。そうしたらわたしたちより先に收容されたのも大勢いました。收容されましたら、沖縄人の通訳がいましたが、それが、若い女は出なさいといつて、奇麗な娘たちが十人ばかり出されました。皆は、これはアメリカがつれて行って乱暴をするのだという話もありましたが、連れて行く時に、「飯はどうして食べるか、炊事をしないと」といって連れて行きました。そうしたら、しばらくしてその娘たちは握飯を持って来て、皆に配ってくれました。

翌日の十二時頃でしたか、通訳が発準備といふので、皆、どこへつれて行くかなと心配すると、この通訳は、嘘を吐くとお前たちはすぐ殺されるぞ、心配する必要ない、いいところへつれて行くのだ、といいましたよ。

そうして潮平・兼城の浜辺につれて行かれるのですが、わたしは日の丸の旗で布呂敷代りに包んで持っていたんですが、アメリカ兵が五、六人で追っかけて来たので、わたしは若いから撃ち殺す考

こでみんな休むことにしました。休んでいるともう一時頃になつていたと思いますが、友軍の兵隊が糸満の方から南へ向かつて行きました。わたしが、「兵隊さん、切り込みに行かれたんですか」ときいたら、切り込みに行つて来たといつて、日本刀も音を立てないように布で巻いてありましたが、その隊長らしい方が、「民間人は殺さないはずだが夜は危いから気をつけて、夜が明けてから行った方がいいですよ、気をつけなさい」と教えてくれましたよ。

それで、「兵隊さん、御苦労さんです」といって別れてから、歩き出したところ、機関銃が激しく撃つて来ました。弾は上へ上つていたので、わたしは皆に散開させて、それから、皆、伏せ、させて弾が静まったので、子供はなるべく大きく泣かしなさい、泣かない子供は、つねつ泣かしなさい、とみんなに言い伝えました。何百人という人でしたが、子供を泣かしたら弾が来なくなりませんでした、それから歩き出しました。もうそろそろ夜が明けまして、アメリカの兵隊も来ました。そうして、手を自分の前に招きまして来いといいました。その時は、甘蔗で杖をついている妻の父が一番前になつて、そのつぎにわたしが歩きました。

糸満の白銀堂のところへ来た時は、もうすっかり夜が明けていましたが、白銀堂の中に、たしかに沖縄の女と思うものが四、五人働いていました。それを見て、わたくしは、「スパイがいて日本は敗けたと兵隊たちが言っていたが、やっぱり沖縄の者でスパイはいたんだな」と思ひまして、憤慨しました。しかし後でわかつたんですが、この姉さん小たちは、早く捕虜にされて、米軍の看護婦となつて、疵ついた避難民の手当てをしたり、避難民へ炊き出しの握えだなど思っていたら、沖縄の金を挟むものにずいぶん沢山持っていました。北谷浜来たら、そこに沢山自動車があつた。それに乗れという。そうしてこれに乗って安谷屋に收容されて、そこに十五日くらいいたら、山原へ移動ということで、また金武村の中川へ行きました。

そこでは避難小屋をつくれといふことでした。そうしたら一日の手間として、一箱ずつ菓子を作りました。その時分には、友軍の兵隊が恩納村の山から、食糧を盗むために毎晩来ていました。ところが食糧は、五日分の配給が一日分にも足りないから、一日で食べてしまつて、あとの四日間は、草や木の葉を食べる。その草も皆で取りつくして、桑の葉のような食べやすいものは、どこにも見当らなくなる。海の藻(ホンダワラ)などもすっかり食べつくして、なくなるので、海がしけて、ホンダワラなどが打ち寄せられるのを待ちかねる。それで天気が悪くずれて海がしけたらみんな喜んだ。そうして海の草を取つて来て、これを煮て食べましたよ。

そうして生活している時に、隣り部落の神谷さんが子供をひとりつれているんですが、神谷さんはびっこを引いて体が不自由であるから、他の人のように、食べられる草や木の葉をあさつてとること

ができないので、他人が取らないカーラウーベール(葉は円く先きはちよつと尖って、葉の裏は白い、山羊がよく食う)を刈りて来て、これを罐詰の空き罐に煮て食べるわけですよ。それで子供は大変な栄養失調で、顔はまるでお盆のように腫れているし、足もゴム風船のように腫れているんです。それでわたしは、見舞に持って行く品は何もないので、手ぶらで今日はどうなっているだろうと見に行くわけです。そうしたら、神谷さんは、それをわたしに食べなさいというんです。山原にはカーラウーベールは大きな葉がありますよ。それから蕨(他府県のわらびではない、和名ウラジロ、食べ物にならない堅い葉。茎では筍や籠などの手工芸品が竹代りに造られる)の葉も大きながあります。神谷さんはこの二つを煮て食べているんです。それを食べなさいとしきりにすすめる。

このカーラウーベールの葉は苦くて食べられたものではありません。医者も薬よりも苦いんですし、それに塩も入れない水だけで煮たもんです。

「わたし重んじてあなたにすすめるのに、兄さん食べて見なさい」というんです。「わたしは今食べて来たばかりだし、あなたたちが可哀想だ」、といつても、せひ食べよと強いるので、「それでは御馳走になるう」といって食べようとするが、苦い上にパサパサしているの喉から落ちないんですよ。しかも水でただ煮たままで塩も入っていないんですからね。

それから、金武の飛行場は、蓬も、いい草の葉も沢山あるそうだから、盗んで来ようといつて、神谷さんも、栄養失調で体が腫れていたが、つれて行きまして、蓬も落ちこぼれ野菜も、摘み集め

福地から糸満へ夕方から行ったのは、ちよつと待ったら、一度に十名、二十名の人が吹き飛ばされるのだから一刻も早く出た方がいいと思つたからでした。

人員は、二、三百メートルもつづいていたのでしようから、何百名位でありましたでしょうか、三、四百名はいたと思います。

識名で牛島中将が摩文仁へ下るのを見たというのは、軍司令官が摩文仁へ下るといふことは話で知れていましたし、わたしは軍隊の経験がありますから軍司令官の移動は間違いないと思います。軍司令官の幕僚といつた将校たちが三十人ばかり先頭で、牛島中将は、雨合羽に軍帽を被って、小雨の中を歩いて行かれました。それはわたし一人が見たのではなくて、識名の墓にいた人たちは、みんな出て、通つて行かれるのを見えています。

捕虜になつた日は、わかりませんが、安谷屋に来てから一週間ぐらい経つてから日本は敗けたとききました。そうすると六月の十五、六日ということになりました。

識名の墓で、おばあさんが帰らなかつた子供は、二人男でしたが、上が七つぐらい、下は年子らしい六つぐらいでした。おばあさんといつしよに行つた女の子は十二、三歳になつていたのでしよう。

註、牛島司令官の摩文仁落ちの首里出發は五月二十七日であるが戦史には時刻が出ていない。城間さんが、その行列を見たという話は、恐らく間違いない。牛島司令官一行であつたらう。これは、沖縄の人で同行者が元気だから、慥かめたいものである。

識名で老婦人と十二、三歳の娘が小さな男の子を二人残して出かけたというが、恐らくこの二人は道中で弾に当つて亡くなつたの

てアメリカ麻袋に入れて帰ろうとしたら、アメリカカーは何も言わないで通したのに、沖縄人の巡査(CP)が、自転車に乗って来て掴まえて来たわけですよ。掴まえられて金網の中に一晚中入れられました。

「お前たちは、ここは入れないという規則は知らないのか」「実は、この人もこんなに栄養失調になつておるし、家に置いてある娘の子は、栄養失調で顔も体も手足もすっかり腫れているので、わたしが連れて来たので、わたしはどうなつてもいいから、この人は許して帰して下さいませんか」

「それでは家にいる子供はどうしているか」、というもんですから、その子は、命が危い、わたしはいつまでもこめられていいですから、この人一人は許して下さい、家に残してある子供が可哀想ですから、わたしがつれて来たのだからわたしはいつまでこめられてもいいです」といいました。

夜明け方になって、どういう風に相談したのか、「病氣の子供がいるというからこの一度はゆるすが、また来てはならないぞ」といつて帰してくれましたよ。「わたしはどうしますか」といつたら「お前も行っていい」と許しました。

隣り部落の神谷さん、父と娘さんは、結局栄養失調でなくなりまして、捕虜になつてからの食糧では、何ともいえない苦しい思いをしました。天氣が荒れて海がしけると喜んで、海の打ち上げられた草を取りに行きますし、桑の木を見つけると人に知られないようにして、葉が出た頃になると取りに行く。

であろう。二人だけ、死んで間もない棺の入つた墓にいた七つぐらいと六つぐらいの男の子たちも恐らく、途中で艦砲かあるいは爆弾などで犠牲になつているだろう。墓、ことに死んだばかりの人を納めた墓は、平時は何よりも恐いものとされていた。そこへ二人の幼年者が入つて、しかも、世にも恐ろしいハブと同居していた。身の毛のよだつような風景である。いかに艦砲が恐ろしいものかが考えられる。

城間 よし子(二十六歳)

主人は海軍に召集されました。わたしは子供が三人で、女の子で七つになるのが上で、五つに三つでした。それで主人のおばあさんのところへ、お父さんにお母さん、それに弟と妹の五名でした。同じ壕に入つておりましたが、戦争が激しくなりましたので、四月二十一日に、壕の中で、お母さんが艦砲で亡くなりました。

それで、こんなに激しくなつては、ここでは助かりそうにないですから、首里へ行こうといひましてね、お母さんが亡くなつた翌日の四月二十二日に、夜どうしで首里へ引越しました。首里のナゲーラというところに、具志堅という大きな墓がありました。中は、棺が三つ入つておりましたが、これを全部出して、そこに一日おりました。そうしましたら向こうからもドンドン、ドンドン艦砲射撃が来まして、水汲みにも出られませんが、また飯も炊かれませんが、ここでもどうにもなりませんからといつて、また移動することにしました。

ナゲラというところは、崎山の裏になっていますが、わたしたちのいた壕の向かいには、野戦病院になっておりました。

ナゲラに一日泊って、そのつぎの日には、大里村の大城の東の方に、大きな自然壕がありました。それを戦さガマといっていた。大きな壕で、五家族が三十名ぐらい、いっしょになりました。そこでは男の方も沢山いましたから不自由はありませんでした。男の方が芋を掘って来ると、女はまた日が暮れないうちに、火が漏れないように囲いをしまして、芋を煮たりしました。そこでは、御馳走が沢山ありました。その部落の人が豚をつぶしたり、馬を殺したりして売りに来ました。そうして不自由なく暮しておりました。

そこに一月ばかりいた時に、アメリカさんが見えてですよ、ピラも落しました。玉城へ行けといつて、あっちに行ったら、配給もくられて、ちゃんとアメリカさんが養ってくれるといいましたが、でもアメリカさんのところへ行かないようにして歩いていくのだから、あっちへ行くのはいやだとみんなで相談しまして、雨の降る中を夜どうし歩いて、ギーザバンタというところへ行きました。あっちに二十日ぐらいいましたが、もうあっちでは壕も何もありません。茅を刈りて掘立小屋をつくって、そこにおりましたけれども、こっちも、もう危くなって、今度は摩文仁の先へ行きまして、広っぱに休んで、壕をさがして入らなければという時でした。そこまではいっしょの人は全部無事に来ましたが、男の人が一人弾に当たって死にましたし、女の人が背中に負ぶっている子供も、また妊娠もしていました。この三人がいっぺんに死んでしまいました。女の人は頭をやられましたが、子供も弾がどこかに当たったんだと思います。

そこは今のヒーザー山の向かいになっています。ギーザバンタから海岸ばたを歩いて来ましたから、摩文仁の丘は向かいになっています。下は岸壁になってね。

皆な出ようというので出ましたけれども、最初アメリカさんの顔を見た時は、身の毛が立ちましたね。お陰様で、かすり疵一つしないでみんな助かりましたが、いっしょに歩いた余所の方が三名亡くなっただけでありました。

捕虜になった時には、具志頭へ歩いて行きましたが、摩文仁の巖壁の反対がわの樋川山といっていました。あの向かいになりませんが、そこに人の死んでいるのは、もう何ともいえないほどでした。木麻黄も阿檀もあるんですが、避難民は全部そこへ追いつめられて、そこでやられていたんですね。赤ちゃんなんか、捨てられていましたよ。それを二、三か所で見ましたね、親は誰もいなくなっていますので、その土手を背にしてずっと連らなって、坐っているようにして死んでいました。ずらーと。その中に一人生きていました。あなたが「あなたはどこをやられましたか」といいたら、足をやられたというんです。それで、「わたしたちといっしょに行きましよう。捕虜取られたらアメリカさんが面倒見てくれるそうだから」と誘いましたら、「もう、家族といっしょにこの方がいいです」といつてきませんでした。女の人でしたが、そうですね、いくつぐらいになっていく人でしょうね、あの時は人の年もいくつぐらいかわかりませんでした。

雨もしとしと降っていました。そこは土手になっていましたが、

この女の人は、ほんとに、一人で苦勞を背負っているように気の毒でありましたが、わたしたちが見ている目の前で、いっぺんに三人が死んでしまいました。

それで、ここまでは三十名ばかりのものが何んのさわりもなく来たんですが、早く壕をさがして入らないと、みんなこっちで死んでしまうといつて、それまではみんないっしょだったんですけれども、それからは自分の家族だけ、みんなのおの、ちょっとでも低い方をさがして入って。ちょうど阿檀の中におね、下へあいたところがありました。岩のところ、それから一人ひとり下りて行って、そこで一週間ぐらいいましたね。水も無くて、御飯も炊いて食べるものも何もありません。それで、すすきの茎を折って来て、あれは中が空いていますからね、あれで岩の間に少しづつ溜っている水を一人ひとり飲んで暮しておりました。子供たちもみんな。

これではもう生きていくことはできない、食べ物もないし、とそう思っている時に、上へ呼んでいました。六月の二十日でしたけれどもね。

「皆、出て来い、食べ物も与えて、着物も与えて、教育も立派にさせてやるから」といっていました。

こんなにしていては、どうせこっちでも死ぬんだから、出て行って明るいところを見てから、おいしい水も腹いっぱい飲んでから死んだ方がいいから出て行こうとみんな相談しました。出たところが、出て見ましたら、上は人がいっぱい死んでいました。もうどことなくです、阿檀の中が。全部がここに集まっていたと思います。逃げるだけは逃げて来てここに集まっていたでしょう。

両方いっぱいしていました。子供も負ぶって死んでいる女の人がいきましたが、子供は白く目をあけていました。雨に濡れていますので、よけい、気の毒で、二度と見られませんでした。若い人で母親は二十歳ぐらいではなかったでしょうかね。

そこから具志頭はどれぐらいありますかね、遠かったようにもありますが、部落みたようなところは歩いた覚えはありません。歩いて行って、川があつたのは覚えてます。その川には死んだ人が、沢山流れていました。川の橋を渡って具志頭の学校の前へ行きましたが、その川の水は真赤でありました。

具志頭からまた歩いて、富里というところに学校がありまして、あっちで御飯を炊いて食べて、そこからまた車に乗せられ百名へ行きました。百名でテントの下で一晩泊って、テントもありません、青空でした。また夜が明けたら、つれられて知念へ来ました。

知念では食物もありまして体も丈夫で、子供たちも元気でした。主人は召集でしたが、海軍陸戦隊に廻わされてニューギニアで戦死しました。召集受けたのは、昭和十八年の八月ですけれどもね、すぐあそこへ廻わされたと思います。

召集されて、佐世保から二度たよりがありました。その後はぜんぜんたよりはありませんでした。

戦死については、長い間、生死不明といつて、調査をしていたようでありましたが、後で、戦死がはっきりわかりまして、公報がありました。

捕虜になったのは六月の二十日でした。そうして知念の方は、子供も大人も、一日に米二合ずつありましたから、食べ物却って余

ったくらいでした。

捕虜になってからは、まったく苦勞をしなかったんです。そうしてずっと知念にいて、ここへ帰られるようになって、知念から直接ここへ帰りました。

宮里 太郎(五十歳) 農業

アメリカの軍艦に、北の海、南の海にいっぱいして沖繩は囲まれておりました。棚原の字は、兵隊たち防衛隊たちが出払ってしまつて、そこへ艦砲が来ました。

そうしましたら、わたしは満五十歳になりましたが、区長さんから、竹槍を作つて、竹槍訓練をやれという命令がありました。それで竹槍訓練の竹槍をつくっていましたら、それはそれはアメリカの艦砲がドンドン来ましたから、これはどうも大変だと思つて、おばあさんたちを壕につれて行つておりました。壕から外に出ると今日死ぬか、明日死ぬか、わからんと思いましたが、それでもわたしは区長さんの命令でありましたから竹槍を持つて、出て見ましたが、北の海から艦砲がドンドン来ますので、竹槍訓練で頑張つても駄目だと思つて壕へ戻つて、おばあさん(母親)と家内と三人でもぐつていました。

そうしたら部落は、あつちの家が焼けた、こつちの家も焼けたで、焼き払われてしまいました。竹槍訓練では、どうも巧く行かないとわかりました。食べる物も忘れて壕へ入れてありませんでしたので、那覇の裁判官邸に、姉さんがおりましたから、姉さんのとこ

して、わたしは、このお父さんと酒盛りをしてお酒を一時頃まで飲みつづけました。三時頃この家の後に艦砲が落ちて来た。馬小屋のいらかを打ち壊し、わたしのおばあさんは座敷に寝ていました。わたしは二人は酒に酔つて寝てトロトロしている時でありましたが、わたしのおばあさんが少し疵をして、このうちのお母さんも少し怪我をしていました。

艦砲が落ちましたので、このお父さんとお母さんは、西原製糖工場の立派な壕に近くにあるといつて、そこへ行きました。しかしそこに行つて十日ばかりしたら、大した疵でもなかったのに、ここのお母さんは、疵に負けて亡くなつたそうです。

翌日は墓をさがして、ここのお父さんが、ここに入つていなさいといつて、墓に入つていましたが、自分の部落の方へ帰つて行きました。

それから三、四日したら、長田(宜野湾市)・南上原(中城村)まで、アメリカが来ているといひました。わたしは、池田の島袋さんで爆風に打たれました、わたしもおばあさんも襲になりました。池田の島袋のお母さんの怪我は、ほんのちよつとだったのに亡くなつたそうですよ。

そうして自分の部落に来て、アメリカは南上原に来ていようといひで弾はどんどん来ました。アメリカは上原(同じ西原村の隣り部落)に来ていようといひで、また池田へ行つて、その先きの南風原村になりますかね、何といふところですかね、そこに泊りました。

部落にいた時は、宮里の壕にいたが、池田へ行く時は雨のしとし

ろへ、艦砲の合間に行つて、何か食い物、米の世話を頼みましたら、姉さんは首里の兼元さんのお孫さんが、刑務所に勤めていて、そこには焼け米があるからといひつて、それを世話してくれました。それで、姉さんも、部落へ帰つて貰つて、壕の中で、焼け米で飯を炊いて食べました。この焼け米取りは昼行つたではありません。晩から行つたのですから、アメリカが照明弾を上げまして、その中から行つたんです。

そうしたら戦争は北谷から上陸して、アメリカはあちこちに大砲を据えつけて、どしどし来しました。それでこつちにはおられないものと思つて、首里の佐渡山殿内の下の壕に、わたしのおばあさんと三人行つて、それから、ゲンチャンのゲンジ、ゲンチャンのお母さん、またお父さん、あれ等四名、わたしたち三名、七名でありました。

そうしてまたそこから、敵は寄せて来るとききましたから、西原の池田といつて行くといひ壕があるといひので、そこへ行きました。

そこへ行く途中の首里の汀良では、友軍の兵隊が、大砲をかざりつけて(据えつけること)太陽が沈んで日が暮れて夜になつてから弾を打ちます。昼やると、アメリカに艦砲されるから昼はやらぬ、夜に撃つていました。

池田についても墓はさがされません。池田の島袋という瓦葺きの家に泊めて下さい、あなた方は壕に行きなさい、わたしたちは一晩はここに泊めて下さい、もし壕に行かれないならいっしょにあなたがたの家に泊めて下さい、そうしてこつちに泊めて貰うことにしました。

と降り、朝の暗い時出ていますが、敵はもうここに来ていました。弾は大へん激しく来しました。

池田のあつちの壕は、甥や姪たちがみんなやつて来て、満員になつて狭くて仕方がないから、また壕をさがしに行きました。

首里崎山の新垣小の墓は、佐久川のお爺さんたちが入つていたが、昨日島尻へ下られたといひつて、ここが空いていたので、三人ここに入つた。ここには十日ばかりおつたかなあ。

それからまた同じ部落のあつちこつちの家族が子供たちも大勢引きつれて来たので、わたしは家族は三人、また狭くて入れない。星は軍の乾パンから何から、艦砲や爆弾で吹き飛ばされているのを、夕方になると、取つて来て、子供たちをはじめ、みんなにやつたりした。

ここに十日ばかりいましたが、その時に、仲本大尉といふ人と、伊藤軍曹、広島の人、中村さん、この三人が、玉城村前川の壕はいくら人間が入つても大丈夫だからあつちへ下りなさいよといひつたので、お父さんといっしょにいひつたです。それで、こん晩一晚はわたしたちここに泊めて下さいとお願ひしてそこにいました。

そうしたら兵隊は八十人つれて行きました。仲本大尉は隊長でした。そうして出かけて行きましたが、帰つて来た時は、この三人と、防衛隊の兵隊は、七人か、八人残つていました。首里の石嶺でやられて帰つて来ていましたが、その人たちにすめられてわたしは、南へ下ることになりました。

敵は石嶺、弁ヶ岳に来ていると話しておられました。首里の新垣小の墓にいっしょにいた人たちは、みんなちりぢりになりました。

ところが、同じ部落の宮平の人たちがわたくしたちのところへ来ていました。正ちゃん、首里の金城の壕で、子供を産んだといっ
て、来ていました。

アコークロー（たそがれ時）になってから、南風原村の喜屋武・照屋へ行くことにしました。それでわれわれは、喜屋武・照屋への道を歩いたんですが、首里から下る吾那原のカーブになっているあたりですね、あっちはもう、馬から、防衛隊の兵隊たちから、重なり合って倒れて、それはもう何ともいえない、大変でした。友軍の兵隊は、道を作っていました、死んだ人を片ずけるのに大変のようでありました。わたしたちの二、三間前にドンドン弾が落ちましたが、当りませんで生き残っています。

そうして喜屋武・照屋で、首里の神村のお父さんたち、それから三男城間の連中もいましたから二、三日しか泊りません。壕もありませんし、人の家にしか泊りませんでしたから。

それからまた、船越・前川は壕が沢山あるといって、下って行きなりました。そこは弾一つも来ません。そうして前川の医者、薬品売っている壕がありましたが、そこに艦砲が落ちたといって、立派に掃除されていました。こっちは誰も入らないから、あなたがた入りなさいといわれて、他のお父さんや、姉さんやら、いっしょになってそこに入りました。そこに十日ばかりいましたら、敵が、前川の近くまで来ているというので、騒ぎました。

前川の前の方に百四、五十人から二百人も入る壕がありましたので、荷物持って入って行ったらこっちは満員していました。そうしたらアメリカが、この壕を取り巻いていましたので、これは射殺

したが、お金もどこへ落としかありません。あっちは、壕荒らしの人もいて、もう何もありませんでした。それから、捕虜は船越の前につれていかれましたが、そこから湧^{ワチナグニ}稲国へ行きました。そうしたら、友軍の兵隊たちが、米俵を積み重ねてありましたが、ごはんをいっぱい炊いて食べようとしていました。それでわれわれが行きましたら、それを見て、御飯をひっくり返して、島尻へいっさんに逃げ出して行きました。東風平辺へ無我夢中で、命限り逃げ去りました。

そこに二、三日おりましたが、山羊も沢山おりましたから、山羊もつづいて、首里・那覇の人たちにも上げました。砂糖も沢山ありました。そこには二、三日しかおりませんが、また知念の方へつれられて行って、家に帰るまでずっと知念へおりました。今はあらあらお話ししましただけで、くわしく見たことはいろいろあります。

首里から下ったつぎの日でした。首里の人が家に行って道具物取って来ようといっ、お母さんと十七、八になる娘さんとしてたよ、あなた方行かない方がいいですよ。敵は首里に来ているから命が何よりも大事ですからといっただんですが、それを聞かないで娘さんは出かけたら、怪我して帰って来たですよ。わたしたちが入っていた喜屋武・照屋の家に泊りましたが、お母さんは一晩中、娘の怪我を心配して泣いてばかりいました。前川に来てからも、そのお母さんはその娘を介抱するために泣いてばかりおりました。

註、宮里さんは、爆風で難になったとご自分でもおっしゃっているが、要点を質問しても、われわれの言葉は聞こえない様子

されるんだなと思ひまして、大変苦労していましたが、また元の入っていた壕に帰ってきました。その翌日前川で捕虜取られました、朝の八時頃にアメリカは来ていました。われわれは、虱があんまり湧いていますので、皆裸になって虱を取っていました、アメリカは、三人ずつ組を作って、銃を持って来ていました。

それで、さあ大変なことになったといっ、壕の中に逃げ込んで長いこと出ませんでした、前川の畑から手を取って来て、わたしたちのところへ投げ入れたりして、出て来いよ、と呼びますので、「さあ、これは、出て行っておじぎをして、命だけは助けて下さい」といって、もしみんなが出ないと、射殺されると大変だといっ、捕虜を取られました。

捕虜を取られて、広っぱに行きましたが、何もかも壕に放り棄てて持っていますので、焼米で炊いた飯もそのまま置いて食べないで来ました。

それから広っぱに行きましたら、前川の前へ。まあ、そうしたら、二、三百人の捕虜が取られて、みんな坐っていました。

十二時頃でありましたが、アメリカの兵隊さんへ、わたしたちは、飯を食べないで来たのであんまりひもじいので、畑から手を取って煮て食べて来たい、壕はすぐそこだから、と言いましたら、アメリカの兵隊さんは、お前たちだけで行くと、他の兵隊から撃たれる心配があるから、わたしたちがいっしょについて行ってやる、といっ、つれて行ってくれました。アメリカにもこんないい精神を持って人にもいるんだなと思いました。

壕に行きましたら、西洋手拭から何から、皿なんかも持っていま

で、区長さんが大声で訊ねると、やっとな通じるくらいで、見聞された悲惨な状態を引き出すことはできなかった。お話しも沖縄方言だったが、語尾が切れて省かれることが多かった。それで話がつかないので、語尾だけは宮里さんの心を取ってつけた。しかし内容は、お話を忠実に訳したつもりである。

宮里 盛光（二十九歳） 防衛隊

わたしたちはですね、最後までその日本人として、沖縄のことなら、飽くまでやるつもりでやっただんですがね、最後まで残って、とうとう捕虜になって、それから約二か年ほどハワイにいて、うちへ帰って来たら十一名の家族が誰もいないし、この部落は、入る家もなく相当苦労しました。

それで家族のことを聞いたら、十一名の家族が全滅したということで、これを聞くと、わたしも死んでおればよかったなと思つたこともありました。

お父さんは前に亡くなっていましたが、お母さんから、兄弟、姪や甥などが全部亡くなっているんですね。わたしは次男ですが、兄長男はですね、満州事変から支那事変、そうして太平洋戦争で亡くなっていますね、そうして、兄さんの妻に子供三名ですから、親子五名亡くなっています。兄は、ブーゲンビルで戦死していますよ。

わたしのすぐの弟の三男坊が部落の青年会長でやっていたようですが、これは防衛隊に行つたと、そういう話がありまして、そうし

て四男坊があの時十五か十六ですが、これも亡くなるし、妹次女は二十四歳で亡くなり、これはずっと軍といっしょで野戦病院にいましたので、どこで戦死したかわたしにはわかりません。

それでうちのお父さんの妹、わたしたちの叔母さんの親子です。ね、この方は主人はいませんが、子供は二人いまして、うちの人たちといっしょに歩いていたようです。

亡くなったのは、真栄平の、ノロ殿内（「祝女」は往時、神事をつかさどった女。殿内はその人の家）で九名、いっしょに全滅したようです。

一番上のうちの兄さんの末子が、あの人に三つぐらいかね、おもちやのようなものを持ってですね、かあちゃん、かあちゃんと呼びながら、死んでいる母親の周りをぐるぐる廻ってですね、母を起そうとするような風にしていたということ、うちの部落の宮里カメさんという方がいられますがね、その方が見られたようだから、くわしくお話を聞かして貰おうと思ってるが、まだ忙がしくて聞きませんがね。それで自分は一人でありますからいつか聞かして貰って、それを何かにしたいと思ってるんですがね、なかなか忙がしくて、そのままにしてあるんです。

それから親戚でも三軒は全滅になってですね、今のところ絶家の状態です。うちのおじいさんの兄弟たちになりますかね、それからもう一軒、本家からの分家ですが、これも全滅で、やはり絶家の状態になっていきます。

もう一軒はこの方（同席の宮里さん）のいところになっていきますが、そこも全滅で、今のところ絶家の状態です。

た。これ以上お願ひするのは、心ないことだと話し合い、上記のように、あらずじだけに止めた。これで沖繩県民の戦禍を推察して貰うほかはない。

比嘉 よし子（十六歳）

みんなといっしょに艦砲が始まってから一月ぐらいいいました。一週間だから島尻へ下りなさいと兵隊さんたちが廻っていましたので、四月の二十二、三日にこっちは下って行きました。

高嶺の製糖工場ところで、玉木先生という方たちといっしょに、それから真栄里に行きましたが、真栄里では、大勢人が死にました。爆弾が落ちる時は、死んだ人の下になって、耳と目を手でかさえていました。

こっちはずっと兵隊さんの炊事をしましたが、あそこでは、薬運びに出なさいといいましたが、わたしは恐いから行かなかったんです。

真栄里は兵隊さんが、非常に死んでいました。まるで転がっているようにいました、兵隊さんなどは。

わたしたちが真栄里に行った時は、アメリカの兵隊さんに、追われた時ですよ。喜屋武の岬に行ったら、喜屋武の岬ですね、もうあそこは、死体ですね、海岸べりにいっぱいいますよ。まるで牛が死んでいるように大きく膨れていっぱいあったんですよ。

わたしたちは、その自然壕にいた時に、出て来い、出て来いといわれて、捕虜取られたんです。

それでわたしもですね、まあ今先きみなさんのお話しの通り、戦争前に早く家内を貰ってということだったんですが、戦争によってこういうことになったんです。うちに来て、自分の家内も出来たんですがね、それでいるいる、その全滅になって。だから早く子供を産んで、やって行き度いと思ってるんですが、家内が病気で手術したり、漢法の治療などもやってたりして、健康は健康ですが、まだうちは子供がいないんです。それで早く子供を作り度いという気持ちはあるんですがね、今からでも遅くはないではないかということもありますが、戦争中、爆弾が落ちてですね、壕に圧さえられて、腰も痛められ、この耳も一方は聞こえないんですがね、そうしてあの枕木ですか、梓木ですね、あれに挟まれて、もう今死ぬようになっただけですがね、戦友と他県の兵隊さんとその木を押してですね、とうとう生きさせてくれましたがね。そのために子供というものが、とうとう出来ないかな、ということも心配してはいません。

註、宮里区長さんは、わたくしたちが、西原村の区長会に、この記録の座談会開催方の依頼に伺ったら、自分の部落の座談会開催を相当強く拒否された。今までどここの町村でも見られなかった非協力的な態度だと思って、どういう理由があるのかと不思議に思っていた。ところがこの座談会で、結婚披露出席のため大あわてに上記のように話されたが、それを聞いて、村区長会での座談会拒否の理由が了解できた。恐らく戦争の話は、この方には惨酷ともいふべきであろう。改めて、お一人だけくわしく語って貰おうと、名嘉史料編集所長がお願いしたが、承諾を得られなかつた。

一番人が死んでいたのは、国吉・真栄里でした。爆弾が落ちた時などは、死体の下に隠れたんですから。

いっしょに歩いたのは、お母さんと弟と、お母さんの兄弟と四名でした。お父さんはいませんが、兄もいません、わたしが上です。